

東日本大震災 被災地訪問支援報告 第2報 (H23年4月8日から11日)

平成23年4月16日

助産所 ままと赤ちゃんの家 助産師 武藤香子
(栃木県助産師会副会長(助産所部会長))

4月7日23時30分、大震災から1カ月になるろうとする夜、強い地震が被災地をふたたび襲った。TVでは、「宮城県宮城野区 震度6強」と、被災地の強い揺れを盛んに報道していた。

夕方までに、積みこんだ支援の食料品は、

フルーツゼリー	40袋	3種類の味
シフォンケーキ	60袋	ホールを1/6にカットして袋詰め
パウンドフルーツケーキ	50袋	1本を10切れにカットして袋詰め
オレンジ入りパン	25袋	小2個入り
チョコパン	5袋	小10個入り
レモンケーキ	60袋	1本を10切れにカットして袋詰め
ワッフル	6袋	8個入り
マフィン	8袋	10個入り
豆菓子	50袋	大豆の砂糖がけ
大豆入りかりん糖	27袋	30g入り
福神漬け	2袋	
味噌	5袋	1kg入り
紅茶豚	21袋	
ぶどう豆	8袋	
黒豆	3袋	300g入り
ふりかけ	9袋	
酢卵	5袋	8個入り
甘酢漬け	12袋	
中華風浅漬け	10袋	
ひじきのあえもの	4袋	
レタス	3個	1個ずつ袋詰め 洗ってある
ココアスクエア	50個	

以上、すべて手造り(那須友の会会員が総出で、7日午前から準備)

その他、手作りクッキー50袋(宇都宮友の会から)

御饅頭 100個 那須塩原市の和菓子屋さんへ注文（那須友の会より）

ケーキ30個と菓子パン20個 那須塩原市のケーキ屋さんへ注文

（栃木県助産師会会長より）

ハムや、焼き豚、生で食べられる肉の加工品 那須塩原市の肉屋さんへ注文

（NPO法人 キッズシェルターより）

500mlペットボトルの水 2箱 （有志より寄付）



以上のものをワゴン車に詰め朝9時に出発の予定で、準備万端、被災地に届けるばかりだった。・・・

翌朝8日、私の出発を心配するメールが次々届く。

「くれぐれも気をつけて・・・」とみなの心配と、期待を一身に背負っての被災地訪問になってしまった。

今回も、災害に備えて、懐中電灯、カイロ、簡易トイレ、毛布 などを持つ。

車は食糧だらけだし、水もたくさんあるから大丈夫だろう、と、おいしい甘い香りに包まれて、幸せな気持ちで、東北道を石巻に向かった。

カーナビの予定到着時刻は、12時30分。3時間の運転位大したことない、と思っていたが・・・やはり甘かった。

東北道仙台南ICから仙台南部道路に入ったところまでは、実に順調だった。

長町ICで高速を下され、多分4号線を北上したのだろう、宮城野区で45号線に入り、多賀城方面へ向かう。

被害の大きかった、若林区あたりから、停電のため信号が止まっている。大きい交差点でも、警察官の姿はない。

あちこちで渋滞が発生し、交差点に突っ込んでくる車に発せられるクラクションで騒然とする中、なんとか、45号線へ右折した。



「前回来た時より、さらにひどい・・・」

「3月11日の地震の時より、揺れた。横に、ぐらぐらと長かった。」仙台に住む人はだれもがそう言うほど、昨夜の地震は強く感じたらしい。

前回もちこたえた建物も、昨夜壊れたのだろう、壁が全部剥がれたビル、ガラスが全部割れ落ちたビル、半壊した建物が目立つ。

「1か月近くが経って、少し片付いて、さあ、がんばろうと思っていた矢先に、また・・・」と誰もがこう口にした。

楽観的にハンドルを握っていた私も、電話の向こうの友人たちが落胆しているのを聞いて、だんだん落ち込んでくる。

信号は動かず、渋滞、クラクション、あちこちで見かける事故の跡、あちこちから現れる救急車、散乱したガラスとガラス・・・店はどこも臨時休業の張り紙で、全く営業していない。

みな、がれきやガラスの処理に追われているか、全くひと気がないか、だった。
「なんとか、石巻日赤につかなければ。」と思い、途中の多賀城市、塩釜市に寄るという計画を変更し、石巻に向かった。
石巻赤十字病院へ、食料をお届けすると伝えてあったし、産科病棟にも伺う予定だった。また、なんといっても、車に積んだ御惣菜などをそのまま車に積んでおくわけにはいかない。もしわるくなってしまったら、皆さんの善意の心を台無しにしてしまう、と思うと、何が何でも石巻に辿り着かなければならないと、かなり必死だった。
いつもはとても優秀なカーナビが、通行止めをキャッチできず、何度も道を引き返す。そうしたことを多くの車が繰り返しているのも、大渋滞に拍車がかかったのだろう。かといって地元の車の後をついていくわけにもいかず、なかなか苦しい運転であった。
「でも、今日石巻に行ったら、(昨夜の地震の直後だから)結構喜ばれるだろうな。」と思い直して、がんばった。

途中、何台も車が流されて、土手に打ち上げられていた。
後で地図を見直してみると、(東松島市)鳴瀬川の5 km上流である。
つくづく津波のエネルギーの凄まじさに恐れおののく。

東松島市を通り過ぎると、いよいよ目的地だ。
停電が解消した地区があるのか、信号が機能している、と思ったとたん、車がスムーズに流れだした。
いつもなら、三陸自動車道で、仙台石巻間は1時間ぐらいたそうだが。
なんと4時間もかかってしまった。

はじめて訪れた石巻は、白く煙っていた。
あちこちで、廃材などを焼却しているようだ。
海岸から2 kmほどのところはどこも、津波にさらわれてしまっているそうだが、それより上流でも、川の水があふれ水につかったそう。

石巻赤十字病院は、今回の大震災で医療の拠点となった病院で、TVでも何度となく放映されている。
今日も、ラジオで何度となく「3人が心肺停止の状態です。石巻赤十字病院に搬送され...余震のショック死とみられる。」と伝えられていた。



病院の周囲には、巨大なテントがいくつも設営され、災害救護隊員たちは、そこで寝泊まりしている。

正面玄関のテントでは、住民の方の問診などが行われていた。

正面玄関には、スタッフが10人ほどで対応しており、本日の診療は、急患のみです、というような対応をされていた。

名前と所属を告げると、院長室に通される。なぜか、院長のご家族扱いになってしまった。飯沼先生は、誰が来たのかと、ちょっと驚いた様子だったが、お姉さんから預かったメールを見せると、いろいろ説明してくれた。

震災から今週いっぱい、病院職員の3回の食事を病院で提供する予定であったが、昨日の余震で、もう少し延長せざるを得ないかもしれないこと。

院長室の隣に、リラクゼーションルームがあって、マッサージなどをうけたり、カウンセリングも受けられるようになっていること。また、是非、産科病棟に寄ってほしいというお話であった。

その後栄養課の職員2名の方が、もって行った惣菜や御菓子を台車で運んでくれた。

「これ全部手作りなんですか?」「わー、きれい。」ととても喜んで下さった。

その後、飯沼院長より、届けた食品は、病院の職員の方たちが、とても喜んで下さったと聞いていたことを、伝え聞いた。



それから、ケーキ30個とパン20個をもって、産科病棟に伺った。

どの病棟も、節電のため、薄暗い。今日は、急患がないのか、とても静かだった。ナースステーションで数人が仕事で、主任さんが(赤十字病院では、係長と呼ぶ)笑顔で対応して下さいました。

助産師会では、全国140か所あまりの助産所で、被災妊婦と産後母子の受け入れをしていることや、携帯からできるメール相談(無料)、妊婦産後のお母さんあてに配るチラシについて説明した。

「これからも、母子が出産後に退院するところが避難所である場合は、助産師会の情報をお伝えしていきます。」と伝えてくださった。

今後も、遠方の助産所に避難してくる産婦や新生児は多くはないであろう。

ただ、宮城県内の助産所に避難してくる母子はいると思われる。

今後は、被災地の母子へ情報を提供し続けること、また、宮城県や、岩手県、福島県の助産所への、個別の支援が必要になってくるだろう。

既に、兵庫県助産師会が、物資の取りまとめをして、必要なところに必要とされている物を送るといふ支援を始めた。

また、仙台友の会が、助産所に避難している母子の食事を、ボランティアで提供して下さると、名乗りでくださっている。

ある助産所では、食器がほとんど壊れてしまったということで、那須友の会から食器を5箱お送りした。

今回は、岩手助産師会の支部長さんとも連絡を取ることができた。

メールの一部をご紹介します。

「・・・マスコミに報道されている以上に現地は厳しい状況にあります。

岩手県の助産師会では、沿岸の拠点病院でお産された方で家を流され、戻るところのない母子と家族の受け入れをしています。受け入れというのは、入院や、盛岡市・花巻市などの行政やNPOと協働して、アパートや保養施設を借り上げたところに避難してもらい、生活全般の支援を行っています。家庭訪問が始まりました。・・・会員がそれぞれ使命感をもってできるところで活動しています。・・・現状としては、被災地の支援物資は余っている状況で、むしろボランティアはそれらの仕分けも含めて倒壊した家具の片づけなど、極生活に根ざした長期的な支援を求めているようです。

私たちも一生懸命頑張りますので、これからも何かと御世話になることがあるかも知れません。その時はどうぞよろしくお願い申し上げます。」

古川ICから先の高速道路通行止めによって、岩手県への訪問は叶わなかったけれども、今後の支援を模索していきたいと思う。

石巻赤十字病院を出た時には、16時だった。

このまま、停電の中を、仙台に戻るのは、無理があると判断し、松島に宿をとった。何件も電話をして、(石巻市内の宿は電話が通じない。もう、その宿は、津波で流されたということなのか。) やっと予約できた旅館だった。

「停電していて、水でない部屋ですが、それでもよろしければ、」と言われ、一瞬迷ったが、車中泊よりはまし、と思い予約した。

薄暗くなっていく中を20km松島まで戻る。

途中から、信号が機能しておらず、携帯電話も予想どおり圏外になった。

今回の津波で松島は、被害の少ないところといわれている。無数の小島が、波の威力を削いだといわれ、他の近隣地域が6.8mから18.3mと高い津波が襲ったのに比べて、松島は、3.0mと発表されていることからわかる。死者、行方不明者もあわせて8名と被害

が少なくて済んだ地区である。

宿泊する宿も、かなり高台にあった。

普通の旅館からは想像できないような雰囲気にもまれていた。宿泊客は、皆作業着か、パジャマかジャージ（地元の方の避難場所になっている。）男性客が約200人、女性客は10数人ということであった。

N T T、東北電力、の作業着を多く見かける。みな、交代で、夜通し作業しているようであった。

余震にびくびくしながらのせいか、あまりよく眠れなかった。隣の部屋では、なにか作業をしている音が響く。暖房が切れているので、カイロを使い、布団をかぶって寝た。

次の日は、被災家庭の片づけを手伝うことになった。

海岸から3km離れているのだが、波は、汚水となって、自宅一階を流していったという。3週間たって、水が出るようになったため、避難所から自宅に戻ったが、7日の余震でまた、断水してしまった。とおっしゃっていた。

「今日まで風呂に入っていないから、臭いがすると思うけど、すみません、すみません」と何度も謝られる。仙台の娘さんのところに「避難しようとも思うのだけれど、一度ゆっくりしてしまったら、もう、立ち上がる元気が、なくなる。もう、石巻に戻ってこれなくなる。」と言う。60歳後半のご主人は、自分でも言っていたが、テンションが上がりすぎていて、ずっと喋り通し。一方奥さんのほうは、暗い気分だということをおっしゃっていて、血压計を持ってうろろろするような様子であった。

「武藤さんは看護婦さんなんですよ？血压測ってください。薬を持っているんだけど、飲んだほうがいいのかしら・・・」と血压測定を頼まれる。

自動血压計なので、だれでも測れるのだが、それでも、看護師に測ってもらおうと安心するのだろう。

汚水にぬれた衣類の整理。汚水にぬれた本の整理。いろいろなものが混じった海水なので、経験したことのない、臭いと、重さに驚く。

さほど大きくない、つぶしたダンボールが2箱分なのに10kgぐらいありそう。



その他、支援物資の仕分けとごみの片付け。作業は、途中カップラーメンでのお昼ごはんをはさんで、4人の青年たちと、一緒に5時間におよんだ。

ご家族からは、ありがとうございます、ありがとうございます、と何度もお礼を言われたが、実は、片付いた実感がない。右から左に物を移しただけ、のような気がする。前回、塩釜市で物資の仕分けを手伝ったときもそうだったが、なんで、こんなに時間がかかるのだろう・・・。



上は、国際飢餓対策機構（HPを是非ごらんください。）で配っていたジャケットを着る青年たち。Royal Mail？

次にやることは、床下の汚泥をかきだし、消毒薬をまいたら、乾燥させ、板を敷いて、新しいたたみを敷くことだそうだ。



この作業を、40坪ぐらいの一軒の一階部分をやるとして、どれぐらいの期間がかかるのだろうか。被害が狭い地域にとどまっているならば、専門の業者を呼んで、修復するというのもできるだろう。

しかし、道路の瓦礫がやっと道路脇によけられただけ、という場所もまだまだ多い。通行止めの道路も多い。

道路に巨大な船舶が横たわっているのを見ると、これをだれが、どうやって処分するのかと、暗澹たる気持ちになってくる。

私は、今日の作業をほんの少し手伝っただけで、普通の暮らしに戻れるが、被災地の人たちは、毎日この現実と向き合わなければならないのだ。

水が15時過ぎにでるようになって、家人は大変喜んでいて。

「みなさん！水がでるようになりました！」ご主人が走り寄って、知らせてくれた。

その後、車に可燃物？と思われるごみを積めるだけ積み込んで、作業させていただいたことを感謝し、ご家族にさよならした。

いつまでも、私の車が角を曲がるまで、手を振っているご家族の姿が、涙で見えなくなりそうだった。

帰り道、高速に乗る手前に、大手スーパーのイオンが、「災害復興セール」と大きくうたっていて、店内は買い物客で大変賑わっていた。
生鮮食品も何でもそろっている。
物流が再開していることははっきりしていた。

ただ、石巻はじめ被災地には、その豊富な商品を買うことができない被災者がまだ、14万人近くいるということを忘れてはいけない。避難所に居る人だけで14万人であるから、経済的に困窮している人はどれくらいの人数になるのか、計り知れないと思う。

今日は、仙台青葉区のおひさま助産院に泊めてもらう予定で、16時30分、石巻を後にした。

渋滞を予想していたが、それほどでもなく、石巻河南ICから泉中央ICまでわずか、50分ほどで到着してしまう。

「高速を使うとこんなに早いんだ。」 8日の渋滞がいかに尋常でない事態であったかが、よくわかった。

助産所についてみると、助産所で出産後入院していた産婦さんも、他院で出産されて産褥入院していた産婦さんも、ともに退院していて、掃除もすっかりすんだ後だった。

一泊し、早朝、山形へ向かう。

山形市内に住む私の両親が心配しているので、顔を見せようかな、と思ったのと、車に積んだごみを早く処分する必要に迫られたのだ。

山形で早速、ごみを分別する。

ごみのほとんどははっきりいって、ボランティアが持ち込んだもの、ペットボトルや、食品のトレイ、袋、支援物資を梱包していた袋などで、もともとの家にあって、処分したものではない、新たに発生したごみなのだ。

分別して、石巻の有料ごみ袋（値段は不明）から、山形の有料ごみ袋（一枚60円）に詰め直す。



山形も、いつもより渋滞が激しい。とにかく、葬式が多い。実家の両親も、親戚が亡くなり、葬式で忙しくしていた。地震のショックで亡くなったようで、7日の地震後に体を丸めた状態で、発見されたそうだ。このような震災関連死はどれくらいの数に上るのだろうか。

栃木に帰って一時間後に、今度は、福島県沖を震源とする大きい地震が起こる。原発が心配で、TVばかり見ていた。栃木でも、皆落ち着かず不安定だ。

このような状況で、身近な人がつらい思いをしていたり、悩み苦しんでいるのを見るのは辛いことだ。

だからこそ、皆で励ましあって、少しでも、喜びや悩み苦しみを分かち合いたいと願う。被災地の復興まで、10年ともいわれているが、もう二度と戻ってこないものは数限りない。だから、ずっと、支える人が必要だ。

これからも、機会あるごとに、すこしずつ支援活動を続けていくつもりです。

この報告書を読んでくださってありがとうございました。

小さい働きではありましたが、なんとか、二度の被災地訪問がかないました。

二度の訪問報告会を4月19日(火)厚崎公民館で行います。

また、支援の輪が広がることを願います。

今回の訪問でバックアップしてくださった、すべての方に心から感謝します。

ありがとうございました。